

## 五 蕃書調所の設立

### 「蕃書調所」設置準備

ところで、洋学所の名称が正式に「蕃書調所」と決定されたのは、一八五六（安政三）年二月十一日である。阿部正弘は「洋学所の儀、向後蕃書調所と相唱え候筈に候間、其意を得らるべく候」と発令した。前述したように、それまで「蘭学」・「蛮学」・「洋学」などと呼び交えられてきた西洋諸国を研究・教育する機関は、日本の中華思想を反映した名称に決定されることになったのである。

さて、蕃書調所設立が具体化したことにより、早速人事が進められることになった。すでに、蕃書調所の人事については、正月二十二日に教授職と教授手伝の候補者、ついで「書物出役」、勤番頭取・勤番の候補者が具体的に提示された。これを表にしたものが、第2表である。この内、事務系職員にあたる勤番組頭と勤番は速やかに決定されたようで、三月二日には勤番の雨宮・真下・斎藤は家族とともに蕃書調所内の御長屋（官舎）に移住するように命じられている。そして、それまで「蛮書翻訳御用取扱」を担当してきた勘定組頭や勘定が任じられた「蕃書調所立合御用掛」とともに、蕃書調所に必要な日用道具などの買い物を始めている。予算は当面金三〇〇両と定められ、江戸本所徳右衛門町に住む用達町人万屋兵四郎に調達を請け負わせた。

### 図書収集

次に、図書の収集である。幕府が所蔵する洋学関係書籍は、紅葉山文庫と天文方に収蔵されていた。これを蕃書調

五 番書調所の設立

第2表 洋学所人事案

役職	人名	身分	手当
教授職	箕作阮甫	松平三河守家来	30人扶持助金20兩
教授手伝	杉田成卿	酒井若狭守家来	
書物出役	高島五郎	松平阿波守家来	20人扶持助金15兩
	川本幸民	九鬼長門守家来	
	手塚律蔵	堀田備中守家来佐波銀次郎厄介	
	松木弘安	松平薩摩守家来	
	東條栄庵	松平大膳家来	
	石井宗謙	三浦志摩守家来	
	田島順輔	板倉伊予守家来	
勤番組頭	伊澤謙吾	御普請奉行美作守三男	御目見以上…銀10枚/年 御目見以下…3人扶持 金1分2朱/月
	小田切庄三郎	御書院番池田甲斐守組	
	鈴木慎一郎	箱館奉行支配調役尚太郎伴	
	小林八十五郎	大御番大久保因幡守組与力	
	杉浦磯吉	新潟奉行支配並役三之助伴	
勤番	森鉢太郎	評定所書役一八伴	70俵 5人扶持
	山本庄右衛門	小普請戸川主水支配御勘定出役	100俵 5人扶持
	水野正之助	小普請組奥田主馬支配	40石 2人扶持
	榎原陳太郎	小普請組小笠原順三郎組	40俵 2人扶持
勤番	雨宮六蔵	小普請組新見豊前守組	15俵 1人半扶持
	真下専之丞	小普請組仙石右近組御作事方書役出役	12俵 1人扶持
	斎藤源蔵	火消役斎藤左衛門組同心	

(出典)「番書調所立合御用留」 (注) 1人扶持 = 1日1人米5合

所に移管する手続きが開始された。まず、一八五六（安政三）年正月に紅葉山文庫と天文方に蔵書の書名目録の提出が命じられた。ところが、必要な書物の多くが貸し出されており、五月に貸出本の返納命令を出したが、回収に手間取ることになる。また、紛失を避けるため、番書調所に収蔵する洋書には「番書調所」という蔵書印を捺すことになった。さらに、諸家に私蔵されている洋書も、書名・出版年・内容の系統を調査し、翻訳本のある場合は六月に一部提出を命じた。

天文方にも五月十四日に、「此度番書調所御取建て相成り候に付、公儀御収貯の番書類都て一旦同所（番書調所―筆者注）へ取集め、御蔵書印押し候筈」として、天文方が預かっていた洋書をすべて番書調所に納めるように命じた。同時に、それまで

天文方で「蕃書和解御用」を勤めていた山路弥左衛門・金之助父子に、「蕃書類翻訳等」は蕃書調所で取り扱うことになったので「其方御役宅にては向後和解御用相勤め候に及ばず」、また現在翻訳に取りかかっている書物も蕃書調所に納めるようにと申し渡した。ここに、一八一（文化八）年以来天文方の職掌の一部として行われてきた「蕃書和解御用」は終止符を打たれることになるのである。

さらに、幕府による洋書購入の独占が図られようとする。これは、先述した一八五五（安政二）年十一月の古賀の構想にみられた洋書出版物の検閲と深く関連するもので、幕府による西洋関係の情報統制の一環である。オランダ船がもたらす洋書は、それまで長崎での改めを経て、幕府が必要とする書物は「御用本」として幕府が買い上げ、それ以外は希望により入札で払い下げてきた。しかし、今後は一旦すべて蕃書調所に納めた上で、希望により歩割をとって幕府が販売する方法が提案された。これによって「密売」もなくなり、幕府の収益にもなるという目論見であった。またこれまで、オランダ人から私的に通詞に贈られた洋書が、諸藩に売却されていたが、こうした事態を重く見て、今後は長崎以外にも下田・函館で外国船と接する機会が増えることで、一層統制が行き届かなくなること懸念し、すべて洋製の品は蕃書調所に納めさせ、その上で入札で希望者に販売することを提唱している。こうした方法が実施に移されたかは明らかではないが、蕃書調所が単に翻訳・研究・教育機関にとどまらず、西洋に関する幕府の情報独占・検閲のための機関として意識されていたことがわかる。

なお、洋書出版物の検閲は実施に移され、一八五六年六月に「新刻・開板致すべき蕃書並びに翻訳書類、以来飯田町九段坂蕃書調所へ差出し、改め請け候様致さるべく候」と、洋書や翻訳書を出版する時には蕃書調所で検閲を受けることが命じられた。

人 事

最後に、蕃書調所出役の人事について述べておく。先に触れたように、一八五六（安政三）年正月二十二日に教授方・教授手伝の候補者が出された。第2表の候補者の顔ぶれをみると、多少の専門性を必要とした書物出役は幕臣やその子弟で占められているものの、教授職と教授手伝はすべて陪臣であることがわかる。また、幕閣の答申では、教授と教授手伝を合わせて五、六人程度の枠であつたが、候補者は合計で九人である。これは、人手不足と認識した古賀が、敢えて教授手伝を三人割増して申請したことによる。この人事は、幕閣で審議され、四月四日に決定された。但し、教授手伝候補者の石井宗謙は他の候補者と折り合いが悪いとの評判で、松平肥前守家来伊東玄朴の弟子原田敬栄に替えられた。教官の人事にあつて、人間関係が選考の重要な基準の一つにされていることは興味深い。また、書物出役の杉浦磯吉も理由は不明ながら外され、五人が任命された。さらに、六月十七日には「句読教授出役」として、設楽莞爾・杉山三八・村上誠之丞の三人と、大久保喜右衛門が「世話心得」となった。また、十一月十六日に教授手伝として近代的軍隊を構想したことで名高い村田蔵六（大村益次郎）、十二月二十九日に天文方和解御用出役の堀田備中守家来木村軍太郎と松平越前守家来市川斎宮が任命された。こうして、蕃書調所は、教授職・教授手伝・句読教授・世話心得の四種類の教官を備えて、業務を開始することになったのである。

六 蕃書調所の開校

開 校

蕃書調所の業務は、一八五五（安政二）年六月の異国応接掛四人からの意見書と、十一月の洋学所頭取古賀謹一郎